

—そして今思うこと 私の仕事と生活

杉浦久子

01.建築との出会い 大学時代

私が昭和女子大学生生活美学科に入学した頃は、まだ被服と建築と学芸員のコースは未分化な状態でした。建築の授業とデザイン関係の授業は全部履修しましたが、平井聖先生の住居史や芦川智先生の設計製図など少人数で贅沢なものでした。建築の先生方の自由な雰囲気が好きだったと思います。また、4年生の学芸員実習は現代美術が好きだったので、品川にある原美術館に転がり込みました。アートと建築との出会いはまさに、大学時代にあったと思います。

02.色々なアプローチ 助手時代

就職は男女雇用機会均等法が成立する以前で4年生女子はいらない、という時代でした。男性と同等なところには行ってみる、というのが私の就職活動でした。望んでいた広告代理店の内定をどうにか得て、そこに就職するつもりでしたが、突然生活美学科内に建築コースが独立するので、助手にならないか、という話が浮上し、非常に悩んだ末に、建築の扉をたたくことになりました。助手時代には竹田喜美子先生、磯野さとみ先生に同行し、川崎の民家調査をいたしました。また、下宿に暮らす外国人の住まい方調査などもいたしました。

03.建築デザインの現場 大学院時代

建築の中でも設計やデザインに興味があって、大学院で設計を行っている早稲田大学の穂積信夫先生の研究室に入りました。女性は私一人で、始めは居場所がない感じがしました。私が在籍した当時は、大きな公開建築設計競技（コンペ）がいくつかあり（第二国立劇場や藤沢湘南台文化センターなど）、当時助手であった古谷誠章先生を中心にコンペばかりを行っていました。大学に泊り込み、寝袋で机の上で仮眠する以外は作業をしていました。

04.私の求めるもの 続助手時代

大学院生時代には皆、登竜门的コンペに挑戦するというのが慣例です。初めてチャレンジした「現代の茶室」というコンペでは、極小の茶室を原寸大のモックアップで、A1版2枚の板材を使ってハンディなものに作りました。1等入選という結果となり、ここから（早稲田大学大学院修士課程修了のあと昭和女子大学に戻り）2度目の助手の時代にこのアイデアは実際に展開し始めました。この頃から「建築とは何だろう」と思うようになり、素晴らしい建築が建っても何だか街はぱっとしない感じであることに疑問を持ちました。自分の暮らしている環境すべてが空間ですから、土木、都市、建築、家具などのジャンルの区分を超えられないものかと思いはじめていました。ヨーロッパの建築に興味を持ったのもこんな気持ちのためだと思います。

05.外からの視点 フランス時代

フランスの建築の現場を見たくて、あるアトリエに入る約束をもらい、パリに向かいました。しかしビサの問題、労働許可証のことなどの難問があり、結局、国立建築学校エコール・ダ・シテクチュール・パリ・ラ・ヴィレット校の研修生として、大学の先生のアトリエと、ジャン・ミッシェル・ヴィルモットという建築家のアトリエに行きました。ヴィルモットのところでは各国の建築家やインテリア、プロダクトのデザイナーたちといっしょに仕事をしました。建築家コースの単位を取り終え、ディプロム（卒業設計と卒業論文）を提出し、公開審査を受け、合格すると政府公認の建築家資格が取得できます。私は「新潟文化センターとその周辺計画」という日本のコンペを題材にしました。近代建築に対して感じていた矛盾を明確にしたいと、あえて日本の敷地で行うことで外からの視点でものを考えてみたいと思いました。

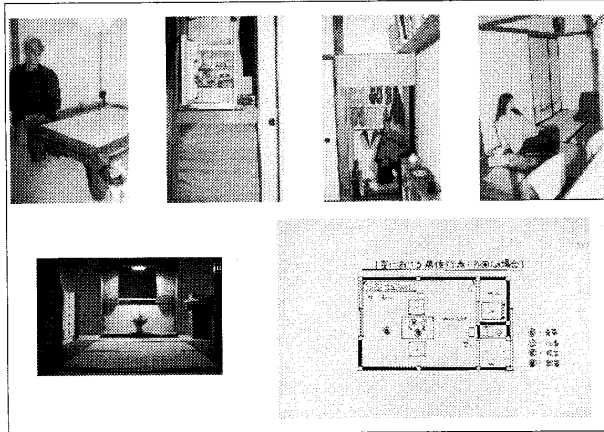
06.日常からの発見 講師時代

昭和女子大学に講師として再就職してから、古谷先生から仙台メディアテークというコンペのお誘いがありました。これは新メディアに対応した施設という未知なるものでしたが、結果は1等を伊東豊雄氏が受賞され、私たちの案は1等案と競いあって2等でした。私にとっては思い出深い作品で、すべての空間がシャッフルされ分けられつつ繋がるという曖昧な空間が出来ていたと思います。この頃から日常の身近な空間の問題を発見し、提案してゆきたいと考え始めました。世田谷の歩道空間の卒論を指導し、調査結果を役所に持っていったことから、土木課の方といっしょに歩道のデザインを研究室で行うことになりました（世田谷区瀬田南歩道デザイン）。多摩川近くで、川原の石が転がりだんだん小さくなるように石が車止めになり、光ファイバーが入ってフットライトになっているものです。その後は研究室で建築のコンペの他に、仮設のプロジェクトを年に一つは行うようになりました。

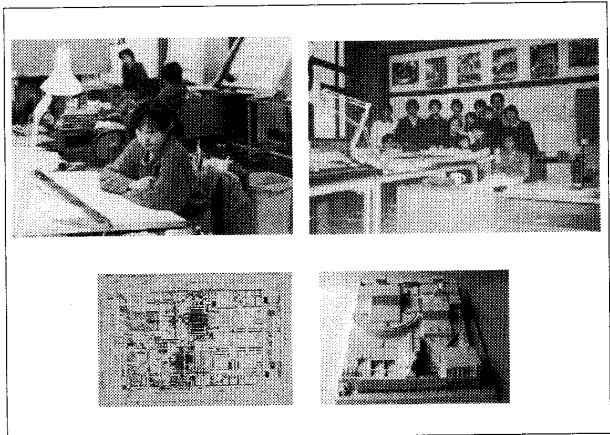
大学も都市空間の一部であるとの思いから、自在に変形する巣のようなものを螺旋階段に寄生させて空間を作ったり（巣・網・けんちく／素・編・けんちく）、地方のまちにアートを仕掛けるプロジェクトに参加したり（桐生再演 5 Picture Communication in Kiryu）、三軒茶屋で活性化していないけれどもポテンシャルの高い空間を発見し、実験的に仮設空間を提示したり（トーク・ピース・ケース、サイクル・プランツ・プロジェクト、世田谷アートタウン2000, 2001）してきました。郊外の住宅地の問題と可能性について地域とともに空間を提示したり（交感ウサギ、家一郊外住宅、取手リ・サイクリングアートプロジェクト2001、蚊帳のウチ、アートユニバーシアード菜の花里見発見展2002）、空洞化する地方都市に残された空間の可能性を住民とともに顕在化させたり（ユキノウチ、越後妻有アートトリエンナーレ2003）、アートや都市、建築といった領域をいつの間にか横断しつつ、学生や地域、役所の方々など様々な人との関係の中から、毎回どこに着地するかは、やってみなければわからない、と暗中模索の中で進んできました。

何ごとも「ダメもと」が私のキーワードで、とにかく何かの縁で依頼されたことは、できる限り何でもやってみようというのが、モットーのように思っています。こうして振り返ってみて、学生時代に友人から「触覚で生きている」と揶揄されたことを思い出し、まったくその通りであると、今にして思います。

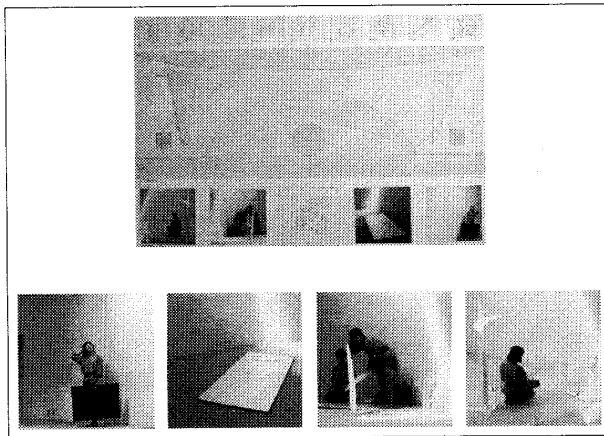
助手時代



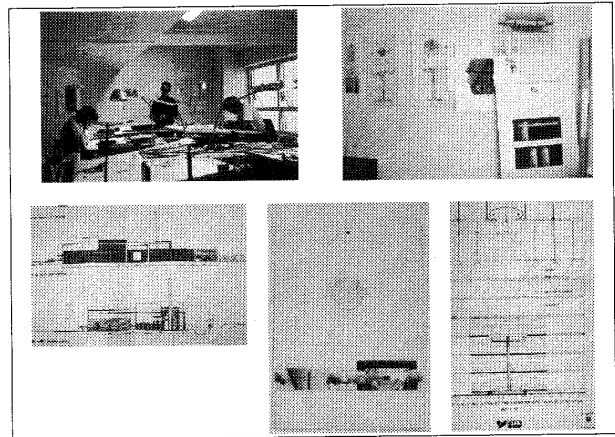
大学院時代



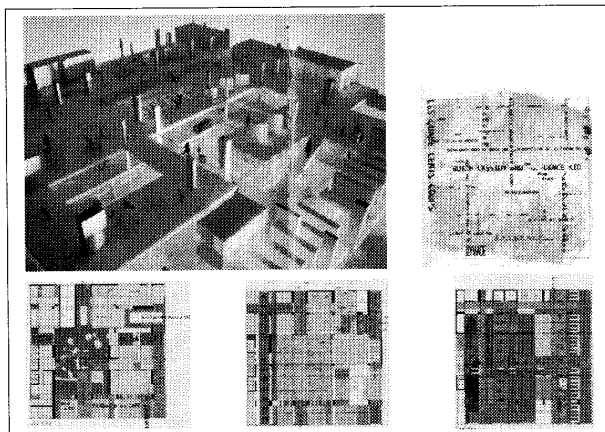
現代の茶室



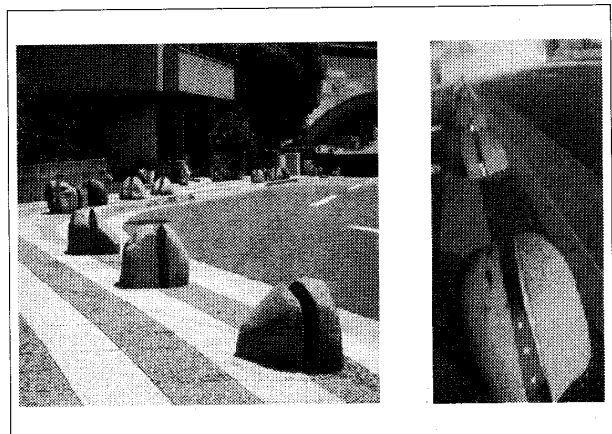
フランス時代 ギルモット事務所にて研修



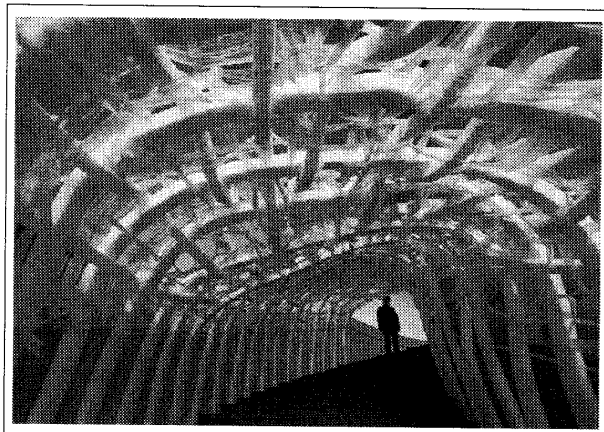
1995 仙台メディアテーク



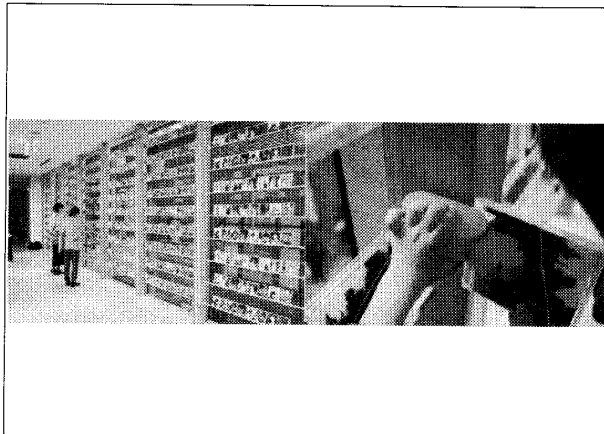
1996-8 歩道デザイン in 世田谷



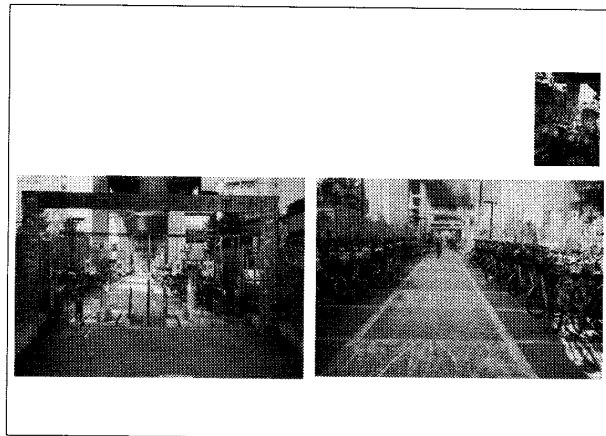
1998 NEST NET ARCHITECTURE
巢・網・けんちく／素・編・けんちく



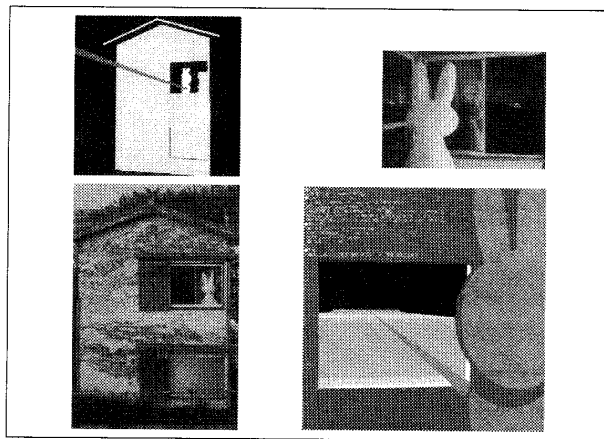
2000 トーク・ピース・ケース in 世田谷



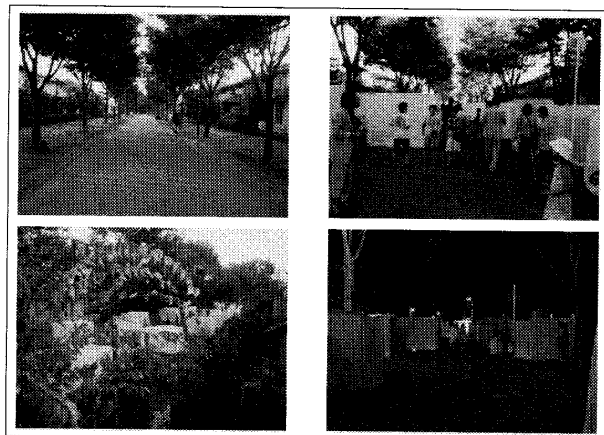
2001 サイクル・プランツ・プロジェクト in 世田谷



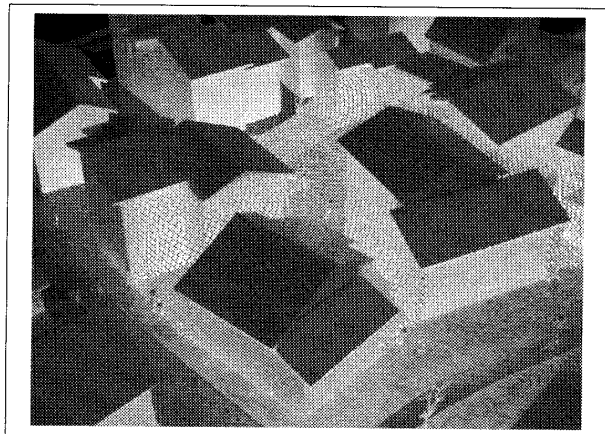
2001 交感ウサギ in 取手



2002 蚊帳のウチ in 千葉



2003 ユキノウチ in 新潟



(すぎうら ひさこ 昭和女子大学生生活環境学科助教授 フランス政府公認建築家)